## 31 長島河岸跡（ながしまがしあと）

堀留運河にかかる長島橋の西側に「長島河岸」と呼ばれる船の方向転換する小さな船だまりとなだらかな斜面の荷揚げ場がありました。浜名湖西岸入出方面（現在の湖西市入出）からの瓦や浜名湖で採取した海草（藻）を和船に帆をかけて運び、この河岸で陸揚げしていました。海草は主に倉松、小沢渡方面に牛車などで運搬され、堆肥として使用されていました。
また、春と秋の鴨江観音の縁日には彼岸参りをするために多くの人々が蒸気船に乗り、この河岸を利用していました。

## 32 堀留運河（ほりどめうんが）

この運河は、明治初めに現在の菅原町を起点として浜名湖を渡り、入出村（現在の湖西市入出）まで船が通った「井ノ田川掘割（通称、堀留運河）」です。
明治５年（１８７２年）、静岡藩の浜松勤番頭井上延陵（いのうええんりょう）と同副組頭田村弘蔵（たむらこうぞう）の発案により建設されたもので、二人の名字の頭文字をとって「井ノ田川掘割」と呼ばれていました。
浜松の地は海に面していても船舶の停泊する港がなく、物資の運搬はもっぱら陸上運送に頼っていたが、この運河の開通により、生活用品の輸送や旅人の移動が大変便利になりました。

## 33 城山遺跡（しろやまいせき）

昭和２４年（１９４９年）、伊場遺跡発掘過程で発見されました。高床倉庫跡や日本最古と言われる神亀６年（７２９年）の具注歴や年代のわかる木簡、土器、唐三彩陶枕（文字を書く時、腕の下に敷いたもの）等が出土し、また敷知郡の郡家があったことから、都との深い関係が理解できます。城山という地名は室町時代末期に曳馬城主飯尾氏の前衛機関としての城柵があったことから名が付いたと言われています。

## 34 秀衡の松（ひでひらのまつ）

二つ御堂（北堂）の西側に藤原秀衡（ひでひら）公が植えたと伝えられる周囲およそ２丈余（約６m）の古い松の大木がありました。
この松は、秀衡公の愛妾の遺体を埋めたところに秀衡公自身が植えられたものと言われ、明治１０年（１８７７年）頃までは朽木となって存在していました。現在のものは２代目の松です。

## 35 馬頭観音（ばとうかんのん）

二つ御堂（北堂）の西側に銅板ぶきの小さな堂宇があり、柱に「中馬宿馬頭観音大菩薩（ちゅうましゅくばとうかんのんだいぼさつ）」の木札がかかっています。開扉すると台座の上に、馬頭と宝冠をつけた、三面八臂（三つの顔と八つの腕）の観世音菩薩が安置されています。憤怒（ふんぬ）の相をした珍しいもので、一般には「馬頭観音」といわれています。

## 36 高札場跡（東若林）（こうさつばあと）

幕府や領主が決めた規則や掟などを木の札に書き、人目につきやすい場所に掲げて村人たちに告知していました。木札は高さ２間（約３.６m）、横１間（約１.７m）、縦０.６間（約１m）ほどありました。

## 37 二つ御堂（ふたつみどう）

奥州平泉の藤原秀衡（ひでひら）公とその愛妾によって、天治年間（１１２５年）頃に創建されたと伝えられています。
上京している秀衡公が大病であると聞いた愛妾は、京へ上る途中、ここで飛脚より秀衡公死亡の知らせ（誤報）を聞き、非常に嘆き悲しみ、道の北側にお堂（阿弥陀如来）を建て菩提を弔いました。その女人はこの地で亡くなったと言われています。
一方、秀衡公は病気が回復し、帰国の途中、ここでその話を聞き、愛妾への感謝と自分の病気全快のお礼のため道の南にお堂（薬師如来）を建てたといいます。それより、この２つのお堂は「二つ御堂」と呼ばれています。

## 38 次郎助池（じろすけいけ）

沼田池は、通称「次郎助池」と呼ばれ、東若林の東南の村はずれにありました。池の東は明神野（現在の神田町）、南は新橋・田尻・法枝に囲まれた周囲およそ半里（約２km）の大きさで、水藻や蓮が茂った池でした。
この池に、いつのころからか大きな蛇が住み着きましたが、村人にこれといった害を加えないので池の主といわれるようになり、水の神として池に祠を建てて祀ったと言われています。
この池は、昭和３８年（１９６３年）から４０年にかけて、浜松市西南部土地改良区の干拓事業により、水田として埋め立てられました。

## 39 一里塚（いちりづか）

一里塚とは、街道の両脇に一里（約４km）ごとの印として木を植えた塚をいいます。慶長９年（１６０４年）、徳川家康は嫡男秀忠に命じて、江戸日本橋を起点として、各街道一里ごとに榎や松を植えた塚を築かせました。旅人にとっては里程の目安、籠などの乗り賃支払いの目安、一息入れる休憩所として利用されていました。

## 40 八丁縄手（はっちょうなわて）

森田から東若林に続く旧東海道の長い畦道（あぜみち）を「八丁縄手（畷）（八丁は約８７４m）」と呼んでいます。この畷は天正５年（１５７７年）に織田信長が、時の奉行に命じて荒れた道路を修復させたものです。その後、徳川家康が大改修をし、江戸時代には諸大名の参勤交代をはじめ、旅人たちの往来が激しい交通路として利用されました。
伊場の坂下にあった鴨江寺の鳥居が、ここから望見された昔は、「鳥居縄手」とも呼ばれていました。

## 41 鎧橋（よろいばし）

国道２５７号線が堀留川にかかっている橋を「鎧橋」と呼んでいます。平安時代（１０世紀半ばすぎ）、鴨江寺は本山の比叡山延暦寺（ひえいざんえんりゃくじ）に無断で戒壇（かいだん）を設置しようとしました。このため延暦寺の僧兵が大挙して鴨江寺に攻め寄せ、鴨江寺側の軍兵は鎧橋の南から城山付近まで逆茂木（さかもぎ）を並べ一帯の田に水を張り、鎧を着て、橋を守り固めて戦いました。このようなことからこの橋は「鎧橋」と言われるようになりました。